

---

# 赤き竜は地に咆えて

サモト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤き竜は地に咆えて

### 【Nコード】

N5673I

### 【作者名】

サモト

### 【あらすじ】

自国の王女の代わりに、大国ニールゲンの皇帝に嫁いだイーズ。弱気な彼女は平穏な生活を望むが、否応なく権力争いに巻き込まれていく。

臆病な少女の成長物語。

\* 試用のため投稿してあります。

自サイトにて連載しているので、1ヶ月後に削除しますm( ) ( )

m

（続きが読みたい！ という広いお心の方。 ”そして銀の竜は星と踊る” で検索してくださいませ）

限りなく草原が広がっていた。草原と対をなす空の下では、羊たちが綿雲のように群れ、のんきに草を食んでいた。そのそばを風のように馬が駆けてゆく。空と草原の交わりを引き裂くように、ティルギスの国の馬たちが雄々しく疾駆していた。

イーズは木の棒で地面に文字を書きながら、時折、その光景に目をやった。のろのろと手を動かし、気のない手つきで字の練習をする。いかにも渋々といった体で、時々落書きをして遊ぶこともしていた。

「今日の分は終わったか」

草の生えていないわずかな土地に、イーズがすべての文字を三十四回ずつ書き終えたころ、イーダッドが様子を見にやってきた。イーズの父親だ。木の杖にすがり、不器用な歩き方をしている。幼い頃に落馬して以来、足が不自由なのだ。

イーズはとっさに父親の身体を支えたが、目が合うとすぐにそらした。イーダッドは異様な風貌をしていた。表情にとぼしい白い面おもては、高い鼻があっても平坦な印象を与える。曲がった背は奇妙に盛り上がり、人とは異なった。

イーズはいつも父親におびえていた。きちんと勉学に勤しんでいたにもかかわらず、まるで悪いことをしてしまったかのように萎縮する。

「終わったなら馬に乗ってきてもいい」

「いい。アルカはとっくに、あっちまでいってしまったから」

イーズは羊の群れの向こうにいる馬たちを指差した。馬の中に赤い帽子が見え隠れする。親友のアルカは大人顔負けの手綱さばきで、馬を縦横無尽に駆っていた。

「どうして私だけ他の国の言葉まで習うの？ 他の子はこんなことしないで済んでるのに」

イーズは地面に書いた文字を棒先でつつきまわした。同じくらしい年の子供たちが、木の棒を振り回してじゃれあっているのを羨ましげにする。

「棒で打ち合うのは嫌いだけど、そっちの方が文字を書くよりは楽しいよ」

「黙って書きなさい。おまえには、もっともつと教えることがある。そのうち、私が習わせた意味が分かるようになる」

「父上はそればかり。そのうち、そのうちって」

イーズは木の棒を振り回した。アルカが遠くから手を振っていた。自由奔放に走り回っている親友の姿に、イーズは少しむくれながら手を振り返す。

「そのうちって、具体的に、一体いつなの？」

「二カ月後だ」

イーズは振っていた手を止め、意外な眼で父親を凝視した。今まで“そのうち”か“大人になったら”のどちらかではなかった答えに、はじめて明確な形が与えられて驚いた。

「二カ月後に、おまえはニールゲンの国に旅立つことになる」

「どうして？」

「アルカの代わりだ」

イーダッドはこちらへ向かってくる馬の群れを見据えた。頑丈にしてしなやかな筋肉を躍動させ、馬は駆けてくる。それを率いるのは、ティルギスの国王が亡き息子の忘れ形見と溺愛する孫、アルカⅡアルマンザⅡティルギス。十になったばかりのはずの彼女は、しかし屈強な馬たちをしっかりと従えて、イーズたちの方へ一直線に向かってきていた。

「イーズ！ 勉強は終わりっ！？」

眼前に迫った馬に、イーズは悲鳴を呑みこんだ。轆かれる、と、強く目を瞑り、木の棒を握りしめる。

だが、予想した衝撃はなかった。砂がイーズの足にかかり、高く馬のいななきが響く。イーズは恐る恐る目を開いた。

「あはは、びつくりした？」

馬から身軽に飛び降りて、アルカはいたずらっぽく笑った。黒くつぶらな目は爛々と輝き、笑う口元は弾けんばかりの快活さを発散している。イーズは口をへの字に曲げた。

「こんにちは、イーダッドおじさま」

「こんにちは、アルカ。今日も元気だね」

イーダッドにつながされ、馬たちは馬飼いの元へ戻っていく。イーズが跳ねる心臓を落ち着けていると、親友の腕が腕に絡まってき

た。

「勉強は終わった？ 終わったなら、あれしよ。取替えっこ」

「また？ もうやめとこよう。怒られちゃう」

答えながら、イーズは父親を上目遣いにした。助けを求めてのしぐさだったが、イーダッドは黙っているだけだった。ならんだ二人の姿をよくよく見比べている。

「父上？」

「どうかした、イーダッドおじさま」

「二人は本当に似通った部分が多いな、と」

観察する目も、感想も、淡々として温度がない。イーズが不安そうにすると、イーダッドは黒い小さな頭を撫で回した。撫でられた方は、少し驚いた顔になった。

「イーズ いや、アルカにも話しておこう。重大な話だ」

「何？」

真っ向から尋ね返すアルカと違い、イーズは黙って父親の言葉を待った。大事な話をするとき、父親の声は一段低くなり、わずかに身がかがまることを知っていたからだ。早くも事の重大さを悟り、木の棒を強く握る。

「今、ティルギスは、糧食が尽きかけている。急速に勢力を伸ばしている我々を警戒して、ニールゲンが各国に圧力をかけ、食糧を渡りにくくしているせいだ」

「ニールゲンって、赤竜の末裔が治めているっていう大きな国ですよ。昔から強くて、豊かな国で。最近おじい様に教えてもらったわ。

意地が悪い国だよね」

「『ニールゲンがくしゃみをすれば、小国が一つ吹き飛ばす』という  
喩えまであるほどだ。ニールゲンの不興を買うのは賢くない。だか  
ら、我々はニールゲンに敵意がないことを示すために、ニールゲン  
の国王を縁故を結ぶことにした」

「エンコ？」

「ニールゲンの王と、ティルギスの王女を結婚させることにした」

「ティルギスの王女って、つまりはおじい様の娘だから、おば様た  
ちのことだよな？ でも、みんな、もう結婚してるよ？」

「だから、ティルギスの王族ということになった。ティルギスの王  
族　つまりはアルカ、君だ」

「私？」

　思わぬところで自分の名前が出てきたので、アルカは面食らって  
いた。ブラブラと揺らし、地面を擦っていた足を止める。その横で  
イーズは固唾を呑んだ。

「私がニールゲンに？」

「ニールゲンの王と年も近い上、血統としても申し分ないのは、王  
の姪であるアルカしかいない」

「……嘘。絶対、いや！ ニールゲンなんて。遠いじゃない。イー  
ズともおじい様とも友達ともお別れってこと？」

　アルカは地面を蹴飛ばした。全身に力をこめて怒る。

　が、イーダッドは、アルカの反応を予想していたのだから、落ち  
着いたものだった。祖父である国王に直訴しに行こうとするアルカ  
を、肩をつかんで止める。

「まだ話は終わってない。最後まで聞きなさい」



イーダッドのアーモンド形の大きな眼は、強い光を宿していた。その光の強さに、イーズは身をちぢめる。

「武術も馬術も人並みにこなせず、奇怪な歩き方から“木偶人形”と揶揄される父親は、それでも王から重用されている。たとえ思うとおりに身体が動かなくとも、すんなりとした、円錐形の手はたったの一振りで屈強な戦士たちを思いどおりに動かす。聡明な頭脳は万の兵に勝る。」

だが、イーズは、父親に尊敬よりも恐れに似たものを抱いていた。明晰すぎる頭脳と奇怪な外見は、時折、肉親だということすら忘れさせる。背の曲がった姿はさなぎを思わせて、イーズはさなぎが羽化するように、いつかこの父親の背が割れて、何か飛び出してくるのではないかと、根も葉もない想像してしまうのだった。

「アルカはニールゲンには行く。だが、アルカが本当にニールゲンに行くことはない」

「意味が分かんない」

「ニールゲンに行くのは、イーズだ。アルカのふりをして、アルカの代わりに行く」

アルカはさつきよりももっと驚いた顔をした。首を右に回す。イーズは棒を握る手をゆるめ、呆けた。

「アルカとイーズの背格好はよく似ている。ニールゲンの使者は、以前アルカを見たが、遠目に見ただけだ。二人を入れ替えても、確実にごまかせる」

緊張にイーズの息が浅くなった。ぐるぐると、父親の言葉が頭の中を回った。父親が二カ月後、といった意味をようやく悟る。

「二人は入れ替わる。アルカは私の娘に、そして、イーズ♠ダイル  
♠ハルミットは、アルカ♠アルマンザ♠ティルギスに」

数百年の歴史を誇るニールゲン皇帝の居城、ファブロ城。天を突くようにそそり立つ城は、訪れる人々を圧倒する。一方で、内部は何度も改修され、豪華にして典雅。来賓たちをことごとく魅了し、ファブロ城を訪れる者は各国の羨望の的だった。

しかしながら。

イーズはその例から外れていた。巨大な壁のようにそそり立つ城は、見渡すかぎり平原のつづく地で育ったイーズに不安を与えた。豪華ではあるが、四方を壁で囲まれ、風も光も感じられない部屋は、イーズの心を味気なくさせた。

「アルカ様、じっとしててください。髪が結えませんが」

ことあるごとに窓の外を見やるイーズの顔を、ティルギスから付き添ってきた女戦士が両手で挟んだ。これから共にティルギスで暮らすことになる女性で、シャルルという。

ティルギスの若者の中で十指に入るほど優秀な戦士で、イーズの護衛である。始終そばにいるため、イーズの身の回りの世話をするのも、彼女の役目の一つになっていた。

「不安そうですね。今朝も食欲がなかったようですし」

「これから王様と謁見だから……。昨日からずっと緊張しっぱなしなんです」

「ニールゲンの王は、アルカ様と同じ年だそうです。きっと仲良くできますよ」「

シャルルは熱のこもらない口調で淡々と励まし、ニールゲンの侍女に教わりながら、手際よくイーズの髪を結っていった。準備が着々と進むのに比例して、イーズの心はどんどん重くなっていく。流暢にニールゲンの言葉を操り、ニールゲンの侍女たちと会話を交わすシャルルを、羨ましそうに見上げた。

「礼の仕方は覚えていらっしやいますよね？」

「……一応」

話すと記憶が飛んでいきそうで、イーズは額を押さえた。シャルルが最後の仕上げに、白い花を髪に挿す。イーズは切実にだれかに代わって欲しいと思ったが、時刻になると、控え屋の扉は無情に叩かれた。謁見の主役は世にも悲壮な顔をした。

「あの……王様に話しかけられたら、私、何を話せばいい？」

「もっと自信を持って。あなたは、勇猛果敢なアデカ王の血を引いているのだから」

あなたはイーズでなくアルカだと、シャルルは暗に強調した。礼儀正しく、するべきことはこなすが、シャルルの態度は冷淡だ。イーズは心の中でため息を吐く。将来有望な、優秀な戦士が、第一線をはなれてこんな遠くまで連れてこられ、年下の、元を正せば普通の子供の侍女の役まで負わされているのだ。不満の一つも言いたくなるだろう。イーズはしよぼくれた。

「一つ聞いてもいいですか？ 私をアルカにするなんて、どうしてそんなことを思いついたんでしょうか。気が強くて賢いアルカの方が、きつとこの国でうまくやれるのに」

「だからです。本物のアルカ様と同じく、ニールゲンの皇帝も気の

強い方だそうですから、王様と喧嘩してしまうかもしれないと、イーダッド様が心配なさったのです」

シャルルの答えに、イーズは「父上のバカ」と心の中でつぶやいた。ティルギスの大使の後について、花の活けられた回廊を渡る。回廊から見える庭園は水と緑にあふれている。人工の滝まであった。ニールゲンの財力を思い知らされ、イーズは感嘆のため息をもらした。

やがて見えてきたのは、竜が彫られた重厚な扉だ。扉の向こうが謁見の間で、中には壁に沿ってニールゲンの家臣と衛兵がならび、アルカ<sup>II</sup>アルマンザ<sup>II</sup>ティルギスの到着を待っていた。精一杯、背筋を伸ばして歩く少女の姿を、部屋中の目が追った。

「お初お目にかかります。ニールゲン皇帝、シグラッド<sup>II</sup>カナ<sup>II</sup>フレイド陛下。ティルギス国王の孫、アルカ<sup>II</sup>アルマンザ<sup>II</sup>ティルギスです」

たどたどしいニールゲン語で、教えられたとおりの口上を述べ、型どおりに礼をし、イーズは顔を上げた。シャルルの言っていた通りだった。ニールゲン皇帝は、大きな王座に、まだ不釣り合いな小さな身体を預けていた。あちらも代役ではないかと思うくらい、玉座が似合っていない。赤い髪に濃い色の肌、とがった爪といった赤竜の末裔らしい特徴があるだけで、イーズが想像していたような竜の恐ろしさはなかった。

イーズの全身から力が抜けた。挨拶が終われば、イーズの出番は終わりだった。後はずっとティルギスの大使の出番だ。鉛を呑んだように重かった胃がようやく軽くなる。身体を締めつける衣服ドレスが煩わしいなと感じながら、イーズは深呼吸をした。

「意外と大人しいのだな」

すっかり安心してティルギスの大使の口上を聞き流していたイズは、はっと我に返った。幼い声は王座の少年皇帝にちがいない。驚いたことに、ティルギスの言葉だ。ティルギスの大使は話をさえぎられて戸惑ったが、皇帝はそれを無視した。

「ティルギスの民は武勇にすぐれ、男も女も豪胆な性格だと聞いたが」

皇帝は立ち上がると、緋色のマントを払った。靴音を響かせて段を降り、婚約者の前に立つ。

イズも大使と同じく狼狽し、わずかにのけぞった。先ほど抱いた愚かな私見を撤回する。皇帝の背はイズよりも指一本分ほど低かったが、黄褐色の眼は強い意志を秘め、イズよりも大人びていた。眼は光を受けると金に変わり、鋭い光を放った。

ティルギスの大使がためらいがちに唇を開いた。だが、皇帝に一瞥されると喉に言葉を詰まらせた。ただ気位の高い我侷な少年に思えるのだが、逆らえない雰囲気があった。地面を踏みしめる様、堂々と開かれた胸、高慢にそらされた顎。身体の部分の一つ一つが威厳に満ちている。

「ニールゲンへようこそ、アルカ<sup>II</sup>アルマンザ<sup>II</sup>ティルギス。道中、この国を見てきたことだと思いが、どうだった？」

たずねられたが、唐突な事態に戸惑ってイズの思考は空回りした。答えを求めて道中の記憶をひっくり返すが、何も思い出せない。

無為に時間を浪費するばかりだ。やがて少年はつまらなさそうな顔になった。

「テイルギスの民は、風のように草原を駆け、誇り高く勇敢だと聞いて楽しみにしていたが、期待はずれだな」

イーズは何かいおうと口を開いたが、緊張で舌が凍って声が出なかった。皇帝は無表情にイーズを見つめていたが、ふと、髪に飾られた白い花に目を留めた。不快そうに眉をひそめ、髪から乱暴に払い落とす。結った髪が乱れ、一筋、二筋、髪がイーズの顔にかかった。あまりにぞんざいな扱いに、イーズは怒りが湧いたが、それでも声は出なかった。

「興が冷めた」

皇帝は踵を返した。大使が弁明しようとしたが、皇帝はすっかり興味を失ってしまった。早く終わらないかといわんばかりに王座に頬杖をついている。

イーズはいたたまれなくなって、うつむいた。謁見の間に参加していた人々は、主の態度を見て、警戒心を軽侮に変えていた。

「アルカ様、気になさる必要はありませんよ。初めてですから、緊張するのは当たり前です。これからですよ」

謁見の後、シャルルは落ち込むイーズをそういつて励ました。さすがに気の毒そうにしている。部屋の中を歩き回っていた大使も足を止め、肩を落とすイーズに助言した。

「そうですとも。これからです。本物のアルカ様になりきってしま

えばいいのですよ。できるでしょう？ アルカ様とは大の仲良しだったのですから」

イーズはためらいがちにうなずいた。頭の中は、やはり最初から本物のアルカがこればよかったのだという考えでいっぱいだった。もしくは、人選を別にすべきだった。イーズはティルギスの子供たちの中でも際立って気が小さいのだ。期待にこたえられなかったことに、深くうなだれる。

「今更、後には引けません。こうなったら、何事もニールゲンの王の気に添うようにして、不興を買わないようにだけお願いします。もし、お二人の仲が険悪にでもなられたら、ティルギスは困りますから」

「……はい」

イーズが自信に比例したか細い声で応えると、大使は不安そうな顔をしながら部屋を出て行った。大使はこれからティルギスに帰る。大使がどんなふうにも報告するかを考えると、イーズはさらに気分が重くなった。



謁見の翌日から、イーズには次期皇妃としての教育がはじまった。歴史に地理に語学に数学に音楽に踊りに宮廷のしきたり 聞いただけで気の遠くなるような量の勉強が待っていた。

早くニールゲンの言葉に慣れるためと、勉強はニールゲンの言葉で行われ、ニールゲンの言葉に不慣れなイーズは聞き取るだけで精一杯だった。付き添っていたシャルルが何度も助け舟を出してくれたが、教師に質問されても質問の意味が分からなかったり、答えが分かってもうまく言葉が作れなかったりするたびに、イーズはもどかしくて泣きそうになった。

「ごめんなさい……。覚えが悪くて」

「悪くなんてありませんよ。私がイーダッド様にニールゲン語を学んだときの方が、もっと時間がかかっていましたから。気にしないでいいんです。覚えられなければ、何回もやればいいだけです。何事も諦めないことが肝心です」

シャルルは相変わらずの淡々とした口調でいい、机に山と積まれた宿題を一つ取った。二人でがんばりましょう、といわれ、途方に暮れていたイーズはじんわりと胸が温かくなった。山から一つ宿題を取る。

「終わったら、気分転換に庭を散歩しに行きましょう。お菓子を用意しているんです」

「うん。がんばる」

小さな籠からただよってきた香りにも励まされ、イーズは力強く

うなずいた。腰が痛くなるくらい机に向かい、宿題を終えると、イーズはやつと散歩に出た。思いつきり伸びをして、解放された自由を味わう。

だが、部屋から出たら出たで、また問題があつた。城の人びとは、ティルギスから来た客に興味深々で、立ち居振る舞いを逐一眼で追ってくる。思いつきり背筋を伸ばしていたイーズは、大臣の不躰な視線を受けて、上げていた腕をそつと下ろした。

「人目のない場所に行きましようか。いい場所があるんです。私が毎朝、鍛練のために使っているんですけど、花も綺麗に咲いていて。きつと気に入ると思いますよ」

「本当？ 連れてって」

「付いてきてください」

シャルルに案内された場所は、確かに静かだった。イーズはまだ城の地理に疎いたため、どこかは正確に分からなかったが、本宮から北へと大分はなれた場所だった。レンガを積んで作られた小さな小屋があり、それを囲むようにして木が植えてある。

「ここ？」

「静かでしょう？ あ、飲み物をおいて来てしまいました。少し待っていてください。すぐ戻ってきます」

菓子の入ったバスケットをイーズに預け、シャルルは身軽に走っていった。

一人になったイーズはきよろきよろとあたりを見回し、眼前の小屋に興味を持った。物置なのか、なんなのか、今は使われていないらしい建物だった。扉の蝶番や門は錆びびついている。ぐるりと回っ

てみると、格子のはまった小さな窓を見つけたが、あいにくとイズの背では中をのぞきこめなかった。

小屋を一巡すると、イーズは小屋を背に座り、地面に落書きをして遊んでいた。だが、一人でいると心細く、落ち着かない。地理を覚えるための思い、イーズは木の囲いから出て、来た道を分かるところまで遡った。

「レギン兄さん！ どこへいくんだい？ 部屋で大人しくしてないと、危ないんじゃないかな」

木々の間をそろそろと歩いていたイーズは、茂みの向こうで上がった声に動きを止めた。向こうから姿が見えないように隠れ、だれがいるのかと様子をうかがう。

「あんまり動き回ると、また倒れて、城中大騒ぎだよ」

いたのは、イーズと同じか年下の少年だった。どこかの貴族の子息といった服装で、赤い髪に濃い色の肌をしている。太っているというほどではないが、肉付きが良く、ふっくらとした身体つきをしていた。後ろに友達らしき少年を二人連れている。

それに対して、話しかけられているレギンと呼ばれた少年は、細い身体つきをしていた。心配されている通り弱々しい印象を受ける。髪は青く、抜けるように白い肌をしていた。

「無視するなよ。せっかく心配しているのに」  
「うるさい、ブレードン」

レギンは赤い髪の少年の腕を払った。だが、相手はあきらめない。

しつこく絡む。

「兄さん、今日は気分がいいのかい？ だったら、一緒に遊ばないか？ さっき、ネズミを捕まえたんだ。こいつを使って遊ぼうじゃないか」

いって、ブレードンはすばやくレギンの胸から何かかすめとった。陽に光ったところを見ると、宝石や貴金属の類いのようなだった。レギンが返せ、と怒鳴るが、ブレードンはうまくレギンの手かわし、仲間にネズミと共に手渡す。仲間たちは手際よく、ネズミに取ったものを結わえ付けた。

「兄さんは少し体力を付けた方がいいよね。ネズミで追いかけてこ  
だ」

「ブレードン！」

叫んで、レギンはげほつと苦しそうに咳きこんだ。逃げていくネズミを追おうとするが、身体が痛いのか、よろめいて地面に膝をつく。

「早く早く。追わないと、逃げちゃうよ」

ブレードンはレギンの周りをうろついて、はやし立てる。見ていて、イーズは気分が悪くなった。明らかにレギンという少年は体調が悪そうだ。それをいじめる根性が許せない。

しかし、いじめの現場に割って入っていくほどの勇氣はない。イーズは自分を情けなく思いながらも、ひとまず、ネズミを探した。せめて、奪われたものを取り返してあげたかった。幸いにも、ネズミはイーズの進行方向へと逃げてきたので、慌てて追いかける。

「 うわっ！ うわあああああっ！」

ネズミを捕まえられると思ったとき、悲鳴が上がった。さっきのいじめっ子たちの悲鳴だ。何事かと驚いていると、ブレーデンたちにつきとばされた。イーズは地面に尻餅をつき、逃げていくブレーデンたちを眼で追った。それから、視線を左向けて、身に迫っている危険に気がついた。

「ひ  
」

怪物がいた。

顔から、さっきいじめられていた少年だと分かったが、身体つきはまるで別人だった。腕や足は筋肉が肥大して太くなり、肌は青くかがやくうろこでおおわれている。爪は鋭くなり、開いた口からのぞく歯はするどくどくがっている。銀色の眼は爛々と光り、獲物をにらむ蛇のそれに似ていた。

「りゅ、竜……？ きゃあっ！」

怪物が爪を一閃させた。ネズミの小さな断末魔が上がった。ついでに、木肌には深々と爪あとが刻まれる。

イーズは恐る恐る顔を上げた。怪物はネズミを凝視していた。ネズミにくつつけられていたのは、ただのガラスのかけらだった。ネズミにつけたと思ったが、巧妙にすり替えられていたらしい。怪物は激昂し、ネズミを爪で串刺しにした。腕を一振りすると、ネズミの死体は爪から外れ、べつの木の幹にぶつかり、原型をなくした。

怪物は血塗れた爪をなめ、イーズの方をむく。

イーズは青ざめた。指先が、足先が、小刻みに震える。逃げなければと焦るが、金縛りにあったように身体が動かない。

「アルカ様！」

駄目かもしれない、と思ったとき、耳に飛び込んできたのはシャルの声だった。それで呪縛が解けた。イーズは決死の覚悟で身を反転させ、シャルの方へ一目散へ駆け出した。

「なんです、あれは!?!」

「分からない! 男の子が急にあなつたの。竜……もどきかな」

「さすが、竜の末裔が治めている国といわれるだけのことはありますね」

シャルはイーズを背後に追いやると、剣を抜いた。突進してくる怪物に剣で応戦する。硬い音がひびいた。刃はうるこの上を滑った。シャルの剣を握る顔が険しくなる。

「シャル、だれか呼びに行こう。この国の人たちなら、竜をなんとかする方法を知ってるかも」

「賛同です。人間や獣は何度も相手にしましたが……竜は初めてです」

シャルはイーズの手を取り、駆け出した。枝を豪快に折りながら、竜は後を追って来る。細い道が終わり、二人は開けた場所に出た。途端、たまたまそこを通りかかっていた召使たちから悲鳴が上がった。

「だ だれかつ！」  
「レギン様が発作を！」

慌てふためいて、召使たちは逃げていく。イーズが後ろを振り返ると、竜は立ち止まっていた。一気に攻撃の対象が増えて、どうしようか迷っているようだった。一瞬、助かったと思ったが、竜の標的が腰を抜かしている老人に定まると、イーズは足を止めた。シャルもほぼ同時に立ち止まる。

「……完全にうろこに覆われてない部分もあると思うの」  
「アル力様はあそこのおじいさんを連れて、安全なところへ逃げてください」  
「あの老人を助けたら、救援を早く呼んで来るね」

シャルは石を投げ、竜の注意をこちらに向けた。イーズは竜を迂回するようにして、老人のところへ走った。

「おじいさん、大丈夫？ 歩ける？」  
「あ……ああ、ありがとう。びっくりして動けなくてね。それより、あの女の子、剣なんて持って。レギン様に傷をつけちゃいけないよ」  
「そんなこといったって、戦わなくちゃ殺されちゃうよ。おじいさん、竜を止める方法を知らない？」  
「そんなものないよ。レギン様の気が落ち着くのを待つだけさ」  
「そんなの待ってたら、だれか殺されちゃう」  
「それでいいんだよ。私たち下々の者が、神聖な竜を傷つけてはいけないんだから。竜王様の血筋に食べられるのであれば、ありがたいことだ」

竜を拜む老人に、イーズは愕然とした。もはやこの場には、シャルとイーズと老人しか残っていなかった。騒ぎを聞きつけてだれ

かが来るけはいもない。この国の人々が老人と同じ考えだったら当たり前だ。レギンを傷つけてはいけないのなら助けは来ないだろうし、進んで生贄になりに来る者もないだろう。

イーズは懐剣を握りしめた。竜は力が強く、姿に合わず動きは敏捷で、シャルルは苦戦を強いられていた。こんな小さな武器では到底かないそうにない。

「何をする気だい。竜に歯向かつちゃいけない」

老人を無視し、イーズは落ちている石をかき集めた。肩にかけていた薄いシヨールでそれを包み、両手で持ち上げる。振り回せる重さであることを確かめ、そつと竜の背後に回りこむ。

シャルルがイーズの行動に気づいて、はっとした。竜から注意がそれた瞬間に、シャルルの形勢は一気に悪くなった。剣を弾き飛ばされ、木の幹に押し付けられる。危機に陥った。

だが、イーズにとっては絶好の機会だった。獲物を追い詰めた竜はすっかり安心して、背後への注意を忘れていた。イーズは眼を瞑り、竜の後頭部めがけて即席の武器を振り下ろした。竜がよろめくと、シャルルが止めに、顎めがけて頭突きした。

「父さんから聞いたことがあるんだ。鎧兜を装備した相手には、刃物でなく鈍器がいいって」

「なる……ほど……鈍器の……衝撃は……防ぐことが出来ませんからね」

シャルルは咳きこみながら応じ、足元で伸びている竜に目を落とす。竜の姿が、徐々に少年へと戻っていく。イーズは全身から力が抜けて、その場にへたりこんだ。



「ごめんなさい。私、全然駄目だ。何もかも台無しにしちゃった」  
「なぜです？」

「さっき助けたおじいさんがいつてたの。本当は、竜は傷つけちゃいけないものなんだって。大人しく食べられるのが、この国の風習みたい」

「そんなバカなことありますか」

静かになったことに気づいたのか、また人が集まってきた。今度は武器を持った兵たちだった。イーズは不安げに両手を組み合わせる。

「心配しないでください。非はあちらにあります。私がなんとかしますから」

シャルルはイーズを後ろにかばった。兵たちは倒れているレギンに駆け寄り、剣呑な眼を向けてきたが、シャルルは毅然として立っていた。

「何者だ」

「何者だとは失礼ですね。この方は、ティルギスの王女、アルカ＝アルマンザ＝ティルギス様です。立っていないで、跪きなさい」

シャルルは胸を張り、居丈高にいった。兵たちは気おされて、自信なさそうに立っているイーズにひとまず膝をつく。

「一体、どういうことですか。将来、この国の王妃になられるお方が襲われているというのに、誰一人助けに来ないというのは」

「気づくのが、遅れて」

「黙りなさい！ アルカ様が無事だったから良かったものの、も

し殺されでもしていたら、ニールゲンはどうやってティルギスに詫  
びて下さるのですか？ ぜひともお聞きしたいですね」

「し、しかし……」

「言い訳は結構。さっさとそこをどきなさい。あなた方のような下  
の者と話したって話になりません。時間の無駄です。ともかく、す  
べての責任はあなた方にあるのですよ？ お分かりですか」

「う……」

「参りましょう、アルカ様。さあ、早く道を開けなさい。ぐずぐず  
していません」

シャルルは兵たちに道を開けさせると、イーズの手を引いた。こ  
んなに強気に出て大丈夫なのだろうかとイーズはびくびくしながら  
後をついていくが、シャルルは堂々としたものだ。凱旋するように  
部屋へと帰る。

「大丈夫？ あんなにいつちゃって」

「たとえ自信がなくとも、堂々としておくものです。命令される立  
場の人間は、ああいう物言いに弱いものですから。これも、イー  
ダッド様の教えですけどね」

シャルルがイーズを振り返って、笑った。微笑ではあったが、は  
じめて見るシャルルの笑顔だ。イーズは嬉しくて、くすつと笑い返  
した。

「アルカ様の判断は間違っていますよ。アルカ様は、もっと自信  
をお持ちになってください。あなたは自分で思っているほど、でき  
ない人間ではありませんよ」

「そうかな？」

そうはいわれても、イーズは自信をもてなかった。本物のアルカ

が優秀すぎるせいもあつたし、ティルギスでは必須である戦士としての才能に自信がないせいもあつた。どうしても自己評価が低くなってしまう。

イーズが首をひねっていると、シャルルはおかしそうに笑った。

「アルカ様は妙な方ですね。たいていのことは人並み以上にこなすのに、自信は人並み以下で。動揺しているかと思えば、時に驚くほど冷静で。臆病かと思えば大胆です」

「ええ？ そう？ だって、私、さっき危なかったとき、動けなかったよ」

「でも、最後は竜に立ち向かっていったでしょう？ 私、びっくりしました」

「だって……シャルルが危なかったから」

イーズがもごもごと弁解すると、シャルルは微笑した。ケガはありませんでしたか、とイーズの身体を確認する。

「とんでもない散歩になってしまいましたね。お菓子も食べ損ねてしまつて。またもらつてきますね」

「せっかく用意してくれたのに、ごめんね」

「あなたのためなら、手間なんて惜しみません。命の恩人ですから」「恩人なんて。シャルルこそ、私の命の恩人だよ。あのとき、シャルルが来てくれなかったら、私、死んでた」

「私はそれが仕事ですから。でも、あなたは私に何の義理もないのに助けてくれた。自分よりずっと大きな敵に歯向かってくれた。あなたのためなら、私はいつ、どんなときだって駆けつけます」

シャルルの眼には、信頼と深い愛情がこもっていた。イーズはなんだか照れくさくてうつむいてしまったが、心の中は喜びで一杯だ

った。

「一緒にがんばりましょう」

シャルルに抱き締められると、自然と自信が湧いてきて、イーズは深くうなずいた。

翌日、イーズの部屋に織物や菓子が届けられた。昨日、イーズたちを襲ったレギンからの詫びの品だった。物にあまりこだわらないイーズでも、一目で分かるくらいに上等な品ばかりで、イーズは眼を丸くした。

「昨日は失礼いたしました」

年嵩の侍女が、ぴくりとも表情を動かさずに謝罪を口にした。レギン付きの侍女だという。髪を後ろにひつつめ、背筋を伸ばし、いかにも厳しそうだ。黄褐色の眼は無感動で、人形にでも見つめられているようで落ち着かない。

「レギン殿下は貴い血をお持ちであるがゆえに、あのような病を持つてお生まれになりました。致し方のないことです。あまり騒ぎ立てなさいませんように」

詫びの品をすべて部屋に運び入れたことを確認すると、侍女はさつさと身をひるがえした。謝りに来たわりには、誠意が感じられない、それどころか尊大な態度だった。シャルルは不快そうに眉をかめた。

「あのおう……」

「何か」

「すみません、来たばかりでよく分からなくて。レギン殿下というのは、どういった方なんですか？」

イーズがおずおずと尋ねると、侍女は片眉をあげた。そんなこと

も知らないのか、といった顔だ。

「陛下のご婚約者でいらっしやるのですから、当然ご存知だと思っておりますが。レギン殿下は、シグラッド陛下の兄にあたります」  
「お兄さん？」

「先代皇帝の正妃ナルマク様の御子で、長男であらせられます。本来であれば王位を継いで当然ですけれども、お身体が弱く、後を継ぐのが難しかったので、シグラッド陛下が代わりに継いでいらっしやるのです」

この城で一番偉いのは、現皇帝ではなくレギンだというように、侍女は語った。

レギンの方は無事なのか、昨日あなつたのはどうしてなのか、聞きたいことはまだあったが、侍女はそれ以上の質問に答えてくれそうなので友好的でなく、イーズは質問を呑みこんだ。今日の教師が来る時間も迫っていたので、黙って引き下がった。

「失礼な方たちですね。口では謝罪していますが、少しも悪いなんて思っていないですよ。あれなら、謝りに来てもらわない方がまだマシです」

「私たちのこと、敵視してるみたいだね。なんでだろ」

「皇帝陛下の婚約者だからでしょう。弟が王位に登っているのが、気に入らない様子ですから」

シャルルは不機嫌な口調でいい、贈り物をそれぞれ適当な場所へ片づけた。

「王様って何人兄弟か知ってる？」

「三人だそうですね。前はレギン殿下の上にもう一人いらっしやっ

て、四人兄弟だったそうですが、お亡くなりになられたそうです。全員腹違いで、現皇帝のシグラッド陛下は第三妃のお子だと聞きました」

「ってことは、昨日レギン殿下をいじめていたのが、三男になるのかな」

「レギン殿下、いじめられていらっしやったのですか？」

「レギン殿下が大事にしてる物を、ネズミにくっつけて、追いかけてこさせようとしたの。レギン殿下、体調悪そうにしてたのに。竜になったレギン殿下に襲われても文句は言えないよ」

「王座争いの絶えない国といえますから、兄弟仲はよろしくないのかもしれないね」

シャルルはなぜか深くため息を吐いた。イーズが不思議に思っって首をかしげると、シャルルはいいにくそうに口を開いた。

「実はこの後の授業に、陛下と、陛下のご兄弟と勉強することがあるんです」

「うえ……」

想像するだけで胃がずしりと重くなった。皇帝とは謁見以来、顔は合わせたことはあっても話をしたことはなかった。向こうに仲良くしようという意思がまったくないのだ。会っても、無視。イーズに対する興味がゼロだ。

「休んじゃ駄目？」

シャルルが申し訳なさそうにする。イーズはがっくりうなだれた。気詰まりな授業になりそうだった。拷問に等しい。

授業はそれから三日後だった。天体の授業で、空にくっつきりと星

が見える時刻になると、イーズは重い足取りで指定された塔に登った。登って、予想通りのメンバーにうんざりした。婚約者のシグラッドに、その兄のレギン、一番年下のブレードン。

三人はすでに着席していた。教師の座るらしい椅子を挟んで、右にシグラッドとブレードン、左にレギンと分かれている。イーズは起立したまま授業を受けたいと思ったが、部屋に控えている召使に促され、レギンの隣に座った。シグラッドが少しこちらを見たようだったが、イーズがそちらを向いたときには、もう眼をそらしていた。

「……でね、シグラッド兄さん、その吟遊詩人、ちゃんと買ってきてくれたんだよ。僕がいつてたのとおんなじのをね。見てよ、これ」

ブレードンはレギンに接していたときとは違い、甘えた声を出して、シグラッドに話しかけていた。シグラッドにすり寄って、美しい刺繍入りの布袋を開けてみせる。イーズは部屋の内装を観察するフリをしながら、その様子を横目にした。

「綺麗だろ？ ザイルの国のものは、なんにしても色が綺麗だよね」

袋から顔を出したのは、赤子の手ほどもあるクモだった。真っ白な身体に青い筋が入った、変わった色のクモだ。ブレードンはそれを手でつかむと、机の上に乗せた。八本の足を器用に動かして、クモは机の上を這う。

レギンの身体がやや強張った。ブレードンの口の端に、ほのかに嘲笑が浮かぶ。嫌がらせも兼ねているようだ。イーズはむっとした。クモを無造作につかみ上げる。



「しまっておいてよ。びつくりする」

クモを突き出すと、ブレードンは眼を点にした。他の二人も驚いた顔をしていた。予想以上に注意を浴びて、イーズの方が驚いた。

「勝手に触るなよ！」

「か、勝手に触ったのは謝るけど、そんなに大事ならしまったままにしておけばいいのに」

「うるさい、僕の勝手だ」

「ブレードン、早くしまえ。もうすぐ教師も来る」

興奮するブレードンをたしなめたのは、シグラッドだった。ブレードンはイーズをにらみつけながら、クモを袋に戻す。怒られたのはおまえのせいだといったげな、恨みがましい視線が突き刺さった。イーズが居心地悪そうにしていると、ようやく教師がやってきた。

「遅れてすみませんでしたね。全員、おそろいですね。では、さっそくですが授業を始めましょうか。今夜は天体の勉強です。星の動きは天の動き。世界の動きを示します。時には恐ろしい予兆を知らせることもあります。眼をそむけてはいけません。恐れず、その忠告を聞き入れ、立ち向かえば、私たちを導いてくれることでしょう」

白いひげをたくわえた学者は、しわくちやの手を望遠鏡にそえ、星を一つ一つ指差しながら、その星の季節による動きや、星と天候の関係を説明していった。イーズは、天体の勉強はそれほど苦労しなかった。何もない平原を移動して暮らすティルギス人は、星を見て方角を判断する。星座を五つ探してくださいと言われて、イーズは十も数えないうちに見つけてしまった。

「アルカ殿下、よろしければ一ついかがです」

窓にはりついて星座を探す三人から、三歩下がったところでイズが暇そうにしていると、白ひげの教師が札を差し出してきた。二十枚くらいある札を、扇形に広げて持っている。テイルギスにも似たようなものがあるので、占いの札だと分かった。

「先生は占いをするの？」

「滅多にしないのですけどね。なにせ、私の占いは良く当たると評判なので、悪いことが的中したら大変です」

教師は冗談めかしていい、いたずらっぽく片目を瞑った。息抜きの遊びなのだろう。イズもつられて笑い、気軽に一枚引いた。

「ふむふむ……これは」

「何が出たの？」

白ひげ老人は札をひっくり返した。馬に乗った戦士が、剣を掲げて勇ましく出陣しようとしている絵が描かれている。

「この札は出発や前進といった積極性を現します。困っていることがあつたら、積極的に対処してみるといいでしょう。絶対にいい結果になりますよ」

「先生！ 先生ってば！ 見つけたよ！ 見つけたから見てよ！早く！」

「はいはい、すぐ参りますよ、ブレーデン殿下」

教師はイズの背中をポンと叩くと、どれどれ、と窓の方へ歩いていった。イズは手渡された札を見下ろし、ブレーデンと一緒に

星を指す婚約者へ目をやる。だが、そう簡単に話しかける勇氣は出なかった。

ため息をついて眼をそらす。レギンと目が合った。とっさに逸らしたくなつたが、ここでも逃げては不甲斐ない。勇氣をふりしぼつた。

「星、見つかった？」

「だい…たい」

どちらも控え目な声量だった。話しかけておきながら、応えておきながら、びくびくと相手と距離を取り合う。

「あ……頭、大丈夫だった？」

「竜のときだったから、あのくらい平気だよ。い、痛かったのは、痛かったけど」

「そ、そうだよ。ごめんなさい」

お互い黙りこみ、眼をそらし合う。ブレーデンのはしゃいだ、甲高い声が耳に響いた。

「……の。ごめん。謝りに行こう謝りに行こうって思ってたんだけど、皆が外に出してくれなくて」

「ううん！ そんなの。私は全然ケガがなかったから気にしないで私の方こそごめんなさい。あなたがブレーデンにからかわれてるところを見ていたんだけど、助けに入る勇氣がなくて。割って入っていれば、あんなことにはならなかったのに」

「止めてくれて、ありがとう。竜になると歯止めが利かないんだ。全身に力がみなぎって、興奮して、何も考えられなくなる。それで、いつも誰かをケガさせて……」

レギンは自分が痛そうに、顔をゆがめた。

「僕は竜の血を濃く継いで生まれてきたんだ。竜の血は適度に濃いと身体を増強してくれるけど、濃すぎると、竜の血に身体が耐えられなくて、病弱に生まれつく。心も竜としての性に侵されて、理性のなくなるときがある。それが、この前の発作だ。竜化の発作って呼んでる」

指先が白くなるほど、レギンは右手で左腕をきつくつかんだ。めくれた袖から、爪の食いこんだような痕がいくつも見えた。自制するために自傷しているのかもしれない。イーズは表情をくもらせた。

「ともかく、君にケガをさせなくて本当に良かった。シグラッドのお嫁さんにケガなんてさせたら、目も当てられない」

「そんな。私は…」

イーズは言いよんだ。婚約者というのは名ばかりだ。宮廷中のだれもが知っている。

「ひよつとして、うまくいってない？ あいつの口から、君の事を聞かないけど」

「うん……嫌われちゃったみたいで」

「あいつ、自分でティルギスの姫がいつていったのに。無責任だな」

「私がティルギス人らしくないから、がっかりさせちゃったみたい」  
「でも、あいつは王なんだ。あいつがアルカのことを無視したら、それはニールゲンがティルギスを無視したってことになる。シグラッドが我侭すぎる」

レギンは義憤を感じているようだった。教師と話しているシグランドをかるくにらむ。

「だいたい、アルカは充分ティルギス人らしいじゃないか。僕に立ち向かってきたんだから」

「第一印象がよくなかったんだと思う。謁見のとき、私、ずっと腰が引けていたから」

「謁見のときが悪かったのか。じゃあ、今は違うかもな。君のおかげで竜化が解けたっていったら、妙に感心していたから」

「レギンは王様と仲いいの？」

「まあね。周りはいいい顔しないけど」

レギンを憂鬱そうにため息をついた。

「アルカはティルギス人だから、馬に乗れるんだろ？」

「乗れるよ。どうして？」

「今度、僕の体調がいいときに、三人で出かけよう。アルカがティルギス人らしいってことが分ければ、あいつも気が変わると思うんだ」

「うまくいくなあ」

「大丈夫。きつとうまくいく」

レギンは自信満々に笑った。授業の終わりには、暇なときは部屋に遊びに来てほしい、と部屋の場所を描いた地図まで渡された。トントン拍子に話が進んで、イーズは思わずぼかんとしてしまった。

「アルカ様も、もう遅いですから、お部屋に帰ってお休みくださいね」

「あ……はい、先生。帰ります。そうだ、これ」

イーズは預かったままだった占いの札を取り出した。返す前に、騎士の絵をまじまじと見つめる。

「何かいいことはありませんか？」

何もかもお見通しといった顔で、教師がにっこりと笑った。イーズははにかみながら、札を持ち主に返す。

「勇気は大きい方がいいです。でも、小さくたってかまわない。自分ができることの大きさを恥じることなんて、ないんです。小さくても、大事な一歩です」

「ありがとうございます、先生」

遠かった皇帝との距離が、少し縮まった。イーズは明るい声で挨拶すると、来たときと違って、かるい足取りで塔の階段を降りた。

イーズがニールゲンに来て、半年が過ぎた。一時期げっそり痩せていたイーズだったが、ニールゲンの生活や言葉にもだいが慣れ、以前と同じ体型にもどっていた。

暇のあるときは部屋の中で貝のように閉じこもっているのが常だったが、今は宮殿内を探検のつもりでうろつく心の余裕もできている。本人も安心していたが、シャルはそれ以上に安堵していた。

「本当に良かった。一時は、このままやせ細って死んでしまわれるんじゃないかと、本気で心配しましたから。いつ倒れるかいつ倒れるかとハラハラしていました」

「私も胃に穴が開くかもって、何回も思ってた」

イーズは苦笑いしながら、卵の白身を泡立てて焼いた菓子をかじった。イーズに食欲があるのが嬉しいらしい、シャルはにこにこしながら、皿に菓子を追加する。

「皇帝陛下とは相変わらずですけどね、悪くもなっていないし。まあ、よしとしましょうか」

「本当はよくないんだろうけど」

淡い緑色のお茶を飲み、イーズはため息を吐いた。

あの天体の授業の日から三ヶ月が経っているが、レギンからはなんの連絡もない。レギンとも会っておらず、レギンとの仲も進展していない。向こうの部屋に遊びに行こうと思っただけなのに、なんだかんだ忙しく、行けなかったのだ。一度、部屋の前までいった

が、例の年嵩の厳しそうな侍女が立っていて、怖気づいてしまったのもある。

「せっかくのチャンスだったのにな」

イーズはぼやきながら、新しい菓子に手を伸ばした。

そのとき、部屋にノックがあった。シャルルが応対に出る。訪ねてきた男と二、三言交わし、戻ってきたとき、手紙を手にしていた。

「誰から？」

「レギン殿下からです」

イーズはタイミングのよさに驚きながら、手紙を取った。赤い封蝋に、王家の印が押されている。レギンからのものに間違いない。開けてみると、前にいていた乗馬の誘いだった。遅くなったことを詫びる言葉も書かれていた。

「やりましたね、姫様」

「でも、問題はこれからだよ」

「久しぶりだからって、馬から落ちるようなことはしないでくださいよ」

「腐ってもテイルギス人だよ」

イーズはさっそくペンを取り、手紙に返事を書いた。

ところが約束の日、待ち合わせの厩舎の前に行くと、レギンの姿が見当たらない。戸惑っていると、先に来ていたシグラッドがいった。



「レギンは急に熱を出したから、今回はこない」  
「え！」

シグラッドに声をかけられたことも衝撃的だったが、それ以上に衝撃的な事実だった。イーズは内心、半泣きになった。レギンという緩衝材があるからこそ、誘いにも乗ったのだ。なお悪いことには、ブレーデンもいる。計算が完全に狂った。

「ここにいる馬は、王族専用の馬だから、好きに選んでいい。先に選べ」

「ど、どうもありがとう」

イーズはうなだれたが、すぐに気を取り直した。予想しなかった事態ではあったが、馬に乗れるのは久しぶりで心が躍っていた。それに、チャンスであることには変わりがない。レギンの心遣いを見逃しにしないために、シグラッドと仲良くとはいかなくとも、知り合いくらいにはなろうと決意する。

厩舎には、ティルギスの馬たちには及ばないが、良質の馬がそろっていた。ティルギスの馬たちは、天馬の血を引いている。ニールゲンが竜の国ならば、ティルギスは天馬の国だ。イーズは故郷を思い出しながら、厩舎を一回りした。

「その馬は兄上がよく乗る馬だよ。兄上がいいっていったらいいと思うけどね」

赤毛の馬の手綱を取ろうとすると、ブレーデンが嫌みつたらしく忠告してきた。そんなことも知らないのか、といった口ぶりだ。

イーズは口をとがらせながら、馬を選び直した。今度は月毛の馬

だ。やさしげな容貌が気に入って選んだ。すると、ブレードンは、へえ、と褒めているのか貶しているのか分からないつぶやきをもらした。イーズはげんなりする。

「それにするのか？」

「どれもいい馬で迷ったけど、この子が一番相性がよさそうだから」  
「……ふうん」

シグラッドもなにかいいたげな返事だった。イーズは何かまずかったのだろうかと心配しながら、シグラッドとブレードンが馬を選び終わるのを待った。

「森の奥に泉があるから、そこまで行こう。ここは王家の狩場だから、使いたかったら、好きなときに使ってい」

「ありがとう」

門の外には、青草の生い茂るゆるやかな丘があり、丘の上には森が見えた。イーズは待ちきれない思いで、馬に飛び乗った。

ところが、馬はなかなか走り出したがらない。困っていると、馬体が揺れた。ブレードンの馬がぶつかったのだ。少し右に寄るが、またぶつかった。二度、三度と、ぶつかってくる。さすがにわざとだとイーズも気がついた。ブレードンがにやにやと口元に笑いを浮かべている。

「テイルギスの民は幼少の頃から馬に乗るっていうけど、そんなものなんだ」

イーズは奥歯を噛み、馬に鞭をあてた。ようやく、馬は素直に走り出した。ブレードンが後を追ってくる。シグラッドがブレードン

の名を叫んだが、ブレーデンは気づかないふりをしたようだった。

「たいしたことないな、ティルギスも！」

追いついたブレーデンが息を弾ませながら晒った。イーズはきつと前を見据えた。野原は終わり、木立が迫ってきていた。表情を引き締め、速度を落とさず木立に突っこむ。木にぶつかりそうで恐ろしかったが、遠ざかっていくもう一つの足音を励みに、懸命に目を開きつづけた。ティルギスの馬より走りが遅い、と自分を落ち着かせる。

「ブレーデンの完敗だな」

先に泉で待っていたイーズに、シグラッドが感嘆した。ブレーデンはおもしろくなさそうにふてくされている。イーズを無視して泉に寄り、水を飲みはじめた。

「馬が悪かったんだ。いつもの馬じゃなかった」

「素直に負けを認める。相手が悪かったんだ」

シグラッドが赤毛の馬から下りると、馬はイーズの選んだ月毛の馬へ寄っていった。二頭は仲睦まじく、たてがみを噛み合う。

「あの二頭、仲がいいんだ。一緒に出すと離れたがらない」

「そっか。だから、なかなかいうこと聞いてくれなかったんだ」

自分の腕が落ちたかと懸念したイーズは、なんだ、とほっとした。

「私のニールゲン語がへたくそすぎて、馬に通じないのかと思った」  
「それもあるかもしれないが」

イーズのおどけに、シグラッドが意地悪く応じた。しかし、本当に悪意はなく、口の端が笑っていた。イーズは酷い、と悲しがって見せた。

「飲むか？」

「ありがとう。久々に乗ったから、すごく疲れちゃった」

飲みかけの水筒にイーズが口をつけると、ブレーデンの視線が突き刺さってきた。召使がブレーデンの水筒を差し出すが、いらないと払いのけてしまう。シグラッドのものがいいのだろう。イーズは飲みづらくなった。

「そういえば、陛下。レギン殿下、大丈夫？ 熱は高いの？」

「分からないが、あっても、たぶん微熱程度だ。ここのとこ調子がよかったし、急激に気温が変化したりもしてないから。レギンが大丈夫と言い張っても、取り巻きのやつらに無理矢理ベッドに押し込んでいるんだろう」

「無理矢理？ どうして」

「私とレギンが仲良くするのが気に食わないのさ。レギンの取り巻きたちは、レギンこそが正統な王と思っているから、私のことを遠ざけたくて仕方ない」

シグラッドは苛立たしげにいった。

「今日のことは、レギンも楽しみにしていたんだ。本当だぞ。今度はこっそり、気づかれないように計画する。悪かったな」  
「う、ううんっ。楽しみにしてる」

また誘ってくれる気があることに、イーズは驚倒しそうになった。

帰ったらさっそくシャルルに報告しようと思心に決める。

「テイルギスの民は幼少の頃から馬に乗り、弓を引くというのが、本当なんだな。すばらしかった」

「でも、私、武術は得意じゃないんだ。戦いになったら、逃げるか避けるの専門」

「なのに、竜化したレギンに立ち向かったのか？」

「だって、シャルルが危なかったし、おじいさんも危なかったし」

「レギンに聞いたときも思ったが、勇気があるんだかないんだか、よく分らないやつだな」

シグラッドはくすくすと笑った。レギンから色々話を聞いているらしい。改めて、イーズは心の中でレギンに礼をいった。

「レギンの部屋って、私が訪ねていっても大丈夫？」

「いいに決まってる。レギンはいつも退屈しているから、絶対喜ぶ。なんなら、今度一緒に行くか？ レギンも会いたがっていたし」

「行く！ 前、行ってみただけど、怖そうな女の人がいる、入りづらかったんだ」

「ああ、あのババアだろう。厚化粧の侍女の。無視して押し入れ。それで無理だったら、窓から忍びこめ。レギンが窓を開けてくれるから」

「素敵な助言をありがとう」

イーズがおかしくてくすくす笑うと、笑いすぎだ、とシグラッドに背中を叩かれた。話してみると、意外と気さくだ。イーズは胸をなで下ろした。

「ねえ、シグラッド兄さん。そろそろ戻ろつよ。早く帰って、料理長の作ったタルトが食べたい」

「おまえが勝手についてきたんだろう、ブレードン。戻りたかったら、先に戻っている」

ブレードンは口をへの字に曲げて、不満そうにした。イーズは慌てて口をはさむ。

「皇帝陛下、そろそろ戻ろうよ。私、帰って宿題しないといけないから。たくさんあるんだ」

「熱心だな。教師たちからも聞いていたが」

「普通だと思っけど」

「宿題を出しても、言った以上に勉強するって、感心していたぞ」

「あー……それは」

言葉がうまく聞き取れず、範囲を間違えているせいにすぎないのだが、うつくしい誤解をあえて訂正することもないだろう。イーズは黙っておいた。

「呼び方、名前でいいぞ。陛下っていうのは堅苦しい」

「ええっと、じゃあ、シ、シグラッ」

発音しようとして舌を噛んだ。シグラッドが吹き出す。

「そんなに呼びにくかったか？」

「ちゃんと呼べるってば！ ちょっと失敗しただけ！ もう一回！」

「いい、いい。それなら、シグって呼べ。これだけ短かったら噛まないだろう。やっぱりまだ苦手なんだな、ニールゲン語」

「だから、呼べるってば！」

イーズは叫ぶが、相手は笑いつばなしでまったく聞いていなかった。完璧にからかわれている。イーズはむくれながら、月毛の馬の

手綱を取った。

途端、ブレードンが帰りはその馬に乗りたいと駄々をこねはじめた。シグラッドは諫めようとしたが、イーズは大人しく馬を渡した。

「悪いな」

「いいよ、私もあいう弟がいたから。慣れてる」

「？ アルカはアデカ王の長男の、一人娘じゃなかったか？」

イーズはぎくりとした。本物のアルカに兄弟姉妹はいない。冷や汗をかきながら、そういう弟みたいな男の子がいたから、といいつくろつ。

「甘やかされて育ったから、わがままなんだ。許してやってくれ」

「馬くらいいいよ。気にしない」

「兄さん、早く早く！」

「おまえの用事で話してるんだ。少しくらい待て」

といっても、ブレードンはしつこく急かす。シグラッドは呆れながら、イーズは苦笑いしながら馬にまたがった。

「シグのこと、大好きなんだね。かわいい弟だね」

「……そうだな」

シグラッドはそっけなく答え、馬にまたがった。その後を、遅れないようにブレードンが一生懸命ついて行く。

イーズはシグラッドの態度に小首を傾げながら、二人の後を追いかけた。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5673i/>

---

赤き竜は地に咆えて

2011年3月4日16時00分発行